「日々の理科」（第 2132 号） 2020,-5,11

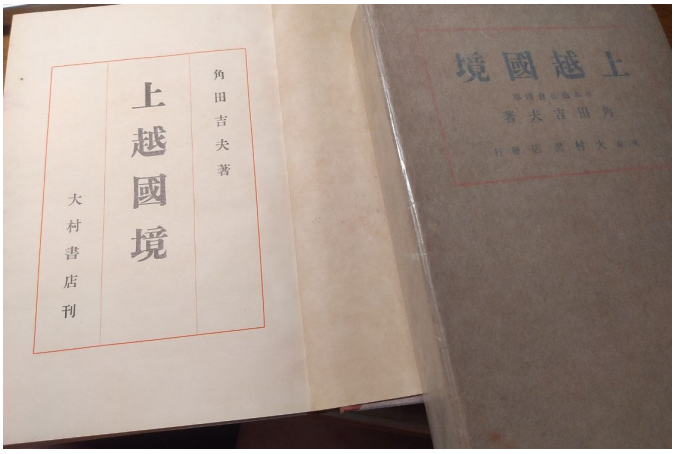
「尾根と谷（５）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

上越国境（群馬・新潟の県境）の連嶺の中でも、谷川岳は名称も有名で、鉄道駅からのアプローチも良い。また山頂や山麓、それに尾根筋にも山小屋があるので、一般ルートとして人気がある。しかし、その北側に伸びる「檜倉山（ひぐらやま）」「米子頭山（よなこずやま）」そして「巻機山（まきはたやま）」などは、鉄道駅から遠く、また友人の山小屋も全くない。そもそも登山道自体も整備されておらず、このあたりの国境稜線は、一般ルートとは言い難い。



最初にこの地域の登山案内を紹介したのが、この本である。その名も「上越国境」---新田次郎の代表作の一つ「先導者」の冒頭でも、この本の一節が引用されている。私は学生時代から長らくこの本を探していたが、３０年ほど前に、神田の悠久堂（山岳書を多く扱う古書店）で探し当て、遂に私の蔵書となった。

付録にすばらしい地図が何枚もついている。この本の刊行は昭和６年で、当時は官製地形図を入手するのが難しかったはずだ。こうした地図や本の記述だけを頼りに、冒険的な登山が行われていたのだろう。

図は、利根川の最上流部の部分拡大である。地形図とはちがい、等高線が記入されていない。「尾根と谷（沢）」、それにピーク（山頂）だけを記したものだ。こうした地図は「概念図」と呼ばれている。簡潔だが、山域の全体像を直感的に読み取ることができる。

利根川の最上流部の水源（源頭）は、明治以来長らく不明だったが、大正時代に「大水上山（おおみなかみやま）」と確認されていた。当時は「刀根岳（とねだけ）」と呼ばれていた。戦後（昭和 29 年）の本格的な調査では、山頂直下の雪渓が源流と判明している。

大水上山は「利根川の最上流部の山」であると同時に、「群馬県最北端の地」でもある。名称も実に立派な山だ。しかし実際に現地に行くと、どこが山頂だかわからないような、「草原の中の丘」といった感じで、拍子抜けする。がっかりするハイカーが多いので、「利根川水源碑」というものが建っていて、この碑を目指して山行計画を立てるパーティーが多い。